

パーキンソン病



常陸大宮済生会病院
診療部長 楠 浩

今回は、パーキンソン病の成因と症状についてお話しします。

脳ではたくさん神経細胞（大脳皮質だけでも約140億個とも言われている）が情報をやりとりしながらネットワークを形成しています。このネットワークによってものを考える、記憶する、運動の命令を出すなど様々な働きが生まれます。

神経細胞間の情報のやりとりは『神経伝達物質』と呼ばれる化学物質を介して行われます。脳には40種類の神経伝達物質が見つっています。その一つドパミンが不足するとパーキンソン病になります。

脳内のドパミンは、加齢とともに減少し、20歳を100%としたときに、ドパミンが20%を割るとパーキンソン症状が出現します。

パーキンソン病は、ゆっくりと進行する原因不明の神経変性疾患です。日本の有病率は、人口1,000人当たり約1人、全体で10万人以上の患者さんがいると推定され、今後はさらに増加することが予測されます。主に40歳から50歳以降に発症しますが、70歳代以上の高齢で発病する方も稀ではありません（40歳前に発病する方もいます）。

症状は、左右どちらか片側から発症します。

初発症状は、振戦や動作緩慢が多いので、「年のせいでは」と思われ、診断が遅れてしまうことがあります。また、便秘や立ちくらみ（起立性低血圧）などの自律神経症状、睡眠障害、気持ちがふさぎこむ（抑うつ）などの精神症状が認められます。

最初から姿勢反射障害やすくみ足で発症することはありません。そのようなときには、パーキンソン症候群を疑います。パーキンソン病とパーキンソン症候群とでは、治療法も経過も異なるので区別して考えなければなりません。

パーキンソン病の4大症状と言われるものは、次のものです。

- ①振戦：力を抜いてリラックスしたときに手足がふるえる。
 - ②筋強剛（関節の硬さ）：関節を曲げ伸ばしするときに強い抵抗を感じる。
 - ③無動（動作緩慢）：患者さんは、表情を変えず、動きが少なく、遅い。
 - ④姿勢反射障害（突進現象）：体が傾いたときに重心を移して姿勢を立て直すことがうまくできず転びやすくなる。
- その他、同時に2つの動作ができない、テンポよく運動ができない等が挙げられます。



パーキンソン病は、完治することはとても難しい病気です。早期発見・早期治療開始がとても重要で、薬物療法・運動療法、定位手術療法、遺伝子療法等を上手に組み合わせ、日々の生活を快適に過ごせるよう工夫することが大切です。

常陸大宮済生会病院 救急患者受入状況

■ 救急車以外
■ 救急車

※救急受け入れの人数を月別に表しています。（休日・時間外を含む）

